

監修者のことば

「この本、間違いなく面白い」、企画時点から確信していました。

私の知っている限りにおいて、アメリカ臨床留学をした医師の中で、女性医師は男性医師に比べて、アメリカに残り続ける率が高いです。それもそのはず、アメリカと日本では、女性医師としての「働きやすさ」が全く違うと思うのです。例えば、

- ・キャリアアップ機会の平等性
- ・出産や育児と仕事の両立のしやすさ
- ・給与や労働時間を含めた待遇
- ・キャリア形成の柔軟性

など、はっきりいって天と地との差ではないでしょうか。正直なところ、私が女性だとしたら、たぶんアメリカに残って仕事をしていたのではないかな…と。

臨床留学経験者が日本と海外の対比をもち出すことを「出羽守（でわのかみ）」などと揶揄されて久しいですが、むしろこの領域に関しては、

**私は声を大にしていいたい、
「アメリカでは！…」と。**

本書で挙げられているような課題について、「日本とアメリカではそもそもの違いが…もごもご」なんていうのはほぼ全て、問題を直視しないための言い訳だと思っています。

日本社会の超優秀な女性たち、本書にもあるように「女の子がお医者さんになるのは大変だよ」などという言葉をかけられながらも、幼少時からさまざまな障

壁を乗り越えて医師になった彼女ら。心の奥底では「日本の医療に貢献したい」「日本で活躍したい」と思っている方も多いでしょう。でも残念ながら、自分のやりたいことやキャリア、生活とのバランスを考えたとき、

日本に戻るといふ選択が取りづらくなっている。

それって、とつても「もったいない」と思いませんか？

本書を一気呵成に書いてくれた4人の著者、腎臓内科、救急、循環器内科、腫瘍内科と専門性はそれぞれです。キャリアの作り方、家庭のもち方（4人中2人の夫が主夫！）、現在の立ち位置などもさまざまですが、女性医師という観点からは一貫したテーマをもっているように思えます。詳しくはぜひ本書をご覧ください。ただ私には表現すると、それは「しなやかさ」、さらには「かるやかさ」でしょうか。もちろん、日々の生活やキャリアの転換点の中で葛藤も数多くあったのだらうと思います。しかしながら、あまたの逆境を跳ね返し、自分らしく生きるその力強い姿が、文章の端々から伝わってくるように感じます。

アメリカで活躍する女性医師4人の「生の声」をお聞きいただき、日々の生き方や考え方に対する気づき、さらには日本の医療の構造問題に対する示唆を得ていただければ幸いです。社会問題に切り込んだ渾身の作、シリーズ第5弾『あめいろぐ女性医師』をぜひお楽しみください。

2020年8月吉日

シリーズ監修 反田 篤志